

肛門括約筋損傷の評価における経会陰超音波検査の有用性

後藤 美希¹ 坂巻 健² 小林 浩一¹

抄 録

目的：鉗子分娩症例を対象として肛門括約筋損傷の診断と修復後の創部確認における経会陰超音波検査の有用性を検討した。**対象と方法**：2013年4月から2015年3月に当院で鉗子分娩となり、検査に同意を得た初産婦30症例に対し前方視的観察研究を行った。分娩後4日目に経会陰超音波検査を施行して肛門括約筋の損傷の有無を視覚的に評価し、分娩立ち会い医の肉眼所見による損傷の評価と比較検討した。**結果**：経会陰超音波検査により肛門括約筋損傷ありと診断した症例は16例（53%）であった。分娩立ち会い医が損傷なしと診断したのは22例（73%）であり、そのうちの11例は経会陰超音波検査では損傷を認めた。分娩立ち会い医が損傷ありと診断した症例は8例（27%）であり、肛門括約筋の修復術が行われた。そのうち3例は経会陰超音波検査時に損傷なし（修復されている）であったが、5例は損傷の持続を認めた。**考察と結論**：鉗子分娩症例では、肛門括約筋損傷の頻度が高かった。経会陰超音波検査を施行することにより、肉眼所見では診断ができなかった肛門括約筋損傷を診断することが可能であった。また、損傷部位がきちんと縫合されているか否かを確認する手段としても有用と考えられた。

Usefulness of transperineal ultrasound in the evaluation of anal sphincter injuries

Miki GOTO, FJSUM¹, Ken SAKAMAKI, FJSUM², Koichi KOBAYASHI, SJSUM¹

Abstract

Purpose: To examine the usefulness of transperineal ultrasound in the diagnosis of anal sphincter injuries in cases of forceps delivery. **Subjects and Methods**: A prospective study was conducted between April 2013 and March 2015. Thirty primiparous women who underwent forceps delivery were evaluated for anal sphincter injuries via visual inspection by medical delivery assistants soon after delivery and via perineal ultrasound by a single physician (FJSUM) 4 days later. **Results**: Eight (27%) and 16 (52%) of the 30 patients were diagnosed with anal sphincter injuries by visual inspection and perineal ultrasound, respectively. Of the 22 patients not diagnosed with anal sphincter injuries via visual inspection, 11 (50%) had anal sphincter injuries according to perineal ultrasound. **Conclusions**: Perineal ultrasound made it possible to detect anal sphincter injuries that were not found via visual inspection by medical delivery assistants. Moreover, it was useful when we wanted to check whether the injuries were repaired or not.

Keywords

anal sphincter injury, perineal ultrasound, forceps delivery

1. はじめに

経膣分娩後の視診と触診による評価では、肛門括約筋損傷は数%程度と言われているが、実際に経直腸ラジアルスキャン検査を施行すると初回経膣分娩後の30～40%に肛門括約筋損傷を認めているという報告もされている¹⁾。分娩損傷による便失禁には分娩直後から自覚症状のある早期発症例と、数年～数十年経過してから発症する晩期発症例があり^{2,3)}、分娩直後に症状がない場合でも肛門括約筋の評価をしておくことは重要である。近年経会陰超音波検査

により分娩後の肛門括約筋損傷の評価を行うことが普及したことで、視診と触診ではわからなかった肛門括約筋損傷の評価が可能になってきている。侵襲が大きいとされる鉗子分娩症例を対象として、肛門括約筋損傷と修復後の創部確認における経会陰超音波検査の有用性について検討した。

2. 対象と方法

本研究は単一施設における前方視的観察研究である。対象は2013年4月から2015年3月に東京山手メディカルセンターで鉗子分娩となり、検査に同意

¹東京山手メディカルセンター産婦人科, ²豊島病院産婦人科¹Department of Obstetrics and Gynecology, Tokyo Yamate Medical Center, 3-22-1 Hyakuninchou, Shinjuku, Tokyo 169-0073, Japan,²Department of Obstetrics and Gynecology, Toshima Hospital, 33-1 Sakachou, Itabashi, Tokyo 173-0015, Japan

Received on March 27, 2019; Revision accepted on February 2, 2020 J-STAGE. Advanced published. date: April 16, 2020